

米子市埋蔵文化財センターたより

第58号 2025年9月



門脇威氏所蔵の考古資料が寄贈されました

2025年6月に西伯郡南部町落合に在住されている門脇威氏より、自らが所蔵している考古資料と鉄道関係資料が寄贈されました。資料の多くは、門脇威氏の父・馨氏と二人で、西伯町内の遺跡から採集されたものとなっています。

門脇威氏は国鉄・JR職員として働く傍ら、山陰考古学研究所のメンバーとして活躍され、JR退職後は山陰歴史館や福市考古資料館の管理員として従事されました。また、南部町の文化財保護審議会でも委員を歴任され、委員長も務められました。現在では、悠々自適の毎日を送られます。

寄贈された考古資料は、南部町内の遺跡から出土した土器や埴輪が木箱にして40箱程度ありますが、中には米子市淀江町にある上ノ山古墳から出土した小勾玉や白玉なども含まれています。これから、整理を進めて寄贈された資料の全容を解明したいと思います。

また、資料の整理作業には、職場体験に来ていた米子南高等学校の生徒2名も参加しました。

米子市埋蔵文化財センターでの職場体験の受け入れは、主に遺跡から出土した土器や石器などの整理作業を中心に行っています。市内の中学校のほか、高等学校の生徒も受け入れていますので、興味を持たれた方はご相談下さい。(佐伯)



寄贈された資料の一部



南高生による土器の洗浄作業

遺跡シリーズ 日吉塚古墳(ひえづかこふん)

-古墳の盛土の中から見つかった弥生時代の絵画土器-

日吉塚古墳は、米子市淀江町中西尾の丘陵尾根にあります。今から約1500年前の古墳時代中期後葉に造られた古墳で、平成5(1993)年と平成12(2000)年に発掘調査が行われ、円筒埴輪や形象埴輪片などが出土しています。直径37.6mの大きな円墳で、この時期の西伯耆の首長墓と考えられています。

今回注目するのは、この古墳の盛土内から出土した弥生時代の絵画土器です。これは、大型の壺の頸の部分で、外面に盾と戈を持って向き合う2人が描かれていると考えられています。この絵画土器と大きさや口の部分の模様などがよく似た土器が、遺跡から約750mの所にある稲吉角田遺跡からも出土しており、同じ時期に同じ職人たちによってつくられたことが想定されています。(井上)



絵画土器(弥生時代中期)日吉塚古墳盛土内出土

整 理 室 た よ り

-目久美遺跡から出土したシカ骨の表面強化を行いました-

目久美遺跡は、昭和57年に新加茂川の拡幅工事に伴う発掘調査が行われた際に、縄文時代の地層から動物骨が大量に出土したことで知られています。

5月に福市考古資料館で実施した資料点検の際に、目久美遺跡から出土したシカの下顎骨の内部が劣化、崩壊しているのを確認しました。

骨が劣化した原因は、長らく海成層に埋もれていたため、骨の内部に生成した塩化物由来の析出物が、骨の組織を内部から破壊したためとみられます。埋蔵環境の影響が、出土した後も長く続くことを示しています。

この劣化対策として、セメダインCをアセトンで溶かして濃度を薄くした溶液を骨の表面に塗布して、表面の強化を行いました。

今後、出土した動物骨の緊急点検を実施して、劣化が見られた骨の強化処理を行います。



シカ骨の含浸強化作業風景

コラム 米子の考古学史 ②喜田貞吉が見た「石鏃三萬」

明治29年に大山の軍馬補充部で見つかった石鏃に興味を持った橋井半雲は、驚異的なスピードで周辺の考古資料を収集しました。前号で、「その数は石鏃だけでも3万点もあった」と書きました。この数は誇張しすぎのようにも思えますが、大正元年に橋井家を訪問し、石鏃の調査をした喜田貞吉^(注1)も、案内役の逢坂八幡宮の宮司太田勝友から「無慮^(注2)三萬」という数字を聞いて、「全国を通じて、これほどの収集家はなかるふと思ふ」と感想を述べています。

半雲のコレクションは、石器や土器のほかにも青銅器や仏像、古銭などで構成されています。これらの品物は、骨董商を通じて入手したものと思われませんが、石器類については、大山町中山周辺の遺跡から採集されたものが中心となっています。

それにしても、個人でこれほどの量の石器を集めることができたのは、自らが所有する広大な土地を開墾したことが大きな理由だったのでしょう。

しかし、石鏃だけでも万単位の点数が出土したということは、裏を返せば、この開墾によって相当な数の遺跡が消滅したことを物語っています。実際に、半雲に従って遺物採集に参加した太田國蔵によれば、植林開拓以前は、丘陵の尾根上に四畳敷ほどの浅い凹所があり、遺物はそこから出たと証言されています^(注3)。これは、古代に作られた竪穴建物が、完全に埋まりきらずに現況を保っていたことの証と考えられます。

このように、表面観察でも分かるほど良好な状態で竪穴建物が残るのは、妻木晩田遺跡の松尾頭地区^(注4)でも確認されていますが、開発が進んだ現代では、ほとんど見ることはできません。考古学黎明期の明治時代には、我々の知らない、保存状態の良い遺跡が残されていたのです。(佐伯)

(注1) 喜田貞吉「我が國発見石鏃の脚に就いて」『考古学雑誌23-1』昭和8年

(注2) 「無慮(むりょ)」とは、およそ、大方の意味。

(注3) 梅原末治『鳥取県下に於ける有史以前の遺跡』大正11年 34頁

(注4) 玉木秀幸『史跡妻木晩田遺跡松尾頭地区発掘調査報告書Ⅳ』平成23年



妻木晩田松尾頭地区の凹地の調査風景
(写真は、鳥取県立むきばんだ史跡公園提供)

埋蔵文化財センター・ 福市考古資料館日誌

- 7月 2日(水) 米子南高校生徒がインターンシップに
～4日(金) より来館。
- 7月12日(土) 彦名ふれあい学級の講師として、下高
室長が講義。
- 7月19日(土) 考古学講演会1「鳥取県の戦争遺跡を
発掘する」を開催。
- 7月20日(日) 米子市美術館で米子市美術館・米
子市立山陰歴史館連携事業企画展
「戦後80年未来へ伝える昭和の戦
争」を開催。
- 7月24日(木) 松江歴史館学芸員が米子城瓦の資料
調査のため来館。
- 7月28日(月) 米子市内小学校なかよし学級などに
～8月27日(水) 古代体験を実施。
- 8月 3日(日) 米子市児童文化センター連携事業
「考古学者になろう!」を開催。
- 8月 7日(木) 八雲立つ風土記の丘学芸員が石州府
古墳出土遺物借用のため来館。
江府町文化財保護審議会委員研修の
講師として佐伯次長が講義。
- 8月 8日(金) 「第52回郷土の歴史教室～戦後80
年記念～戦争の歴史を学ぶこども夏
休みバスツアー」に協力。
- 8月14日(木) 米子公会堂主催の米子市公会堂夏祭
りにわたあめを出店。
- 8月20日(水) 米子市小学校教育研究会社会科部
会研修の講師として佐伯次長が講義。
- 8月20日(水) 九州大学教授乗畑氏、出雲市幡中氏
・21日(木) 富繁渡り上り遺跡出土土器調査のため来館。
- 8月21日(木) 丹波市教育委員会職員3名が視察。
- 8月23日(土) 鳥取県商工会議所主催で下高室長が
米子城を案内。
- 9月 5日(金) 九州歴史資料館小林氏が大塚山横
穴墓群出土鉄釘調査のため来館。
- 9月 8日(月) 島根大学生がインターンシップにより
～12日(金) 来館。

- 9月12日(金) 松江歴史館学芸員が米子城瓦の借用
のため来館。
愛媛大学生が製塩土器調査のため来
館。
- 9月18日(木) 山口県立萩美術館陰田隠れが谷遺跡
出土土馬借用のため来館。
- 9月27日(土) 史跡ガイドウォーク1「米子城下町Ⅰ」
を開催。

編集後記

コラム執筆のため久しぶりに『喜田貞吉全集』
を開いてみたら、大正11年8-9月の「学窓日記」
の記事「子無し税」が目につきました。

とある新聞の論説、「3人以上子供がいる家庭
の税金を免除せよ、独身者からは子無税を徴収
せよ。」当時の日本は空前の人口増加期、コメ不
足が深刻化する世相を反映しています。

これに対して喜田は、増えすぎた人口のはけ口
を海外に求めれば必ず軋轢が生じると指摘し、
「逆に結婚税を設けよ」と反論しました。戦前は、
日本人の海外移民が盛んに行われていた時代、
小さな国土では養える人口も限られます。

そして、喜田が批判した時代から100年以上
が経過した現代は?・・・コメ不足は相変わらずで
すが、日本は空前の人口減少期を迎えています。

辛口批評の喜田が、今の日本を見たら何と言
うでしょうか。(佐伯)

発行日 令和7(2025)年9月30日
発行者 米子市埋蔵文化財センター
所在地 鳥取県米子市福市281番地
指定管理者 (一財)米子市文化財団
電 話・FAX 0859-26-0455
Eメール yonagomaibun@clear.ocn.ne.jp